第９回北海道教育推進会議高等学校専門部会
審議のまとめ［概要］

北海道教育庁新しい高校づくり推進室

日　時　平成 30 年３月 19 日（月）16:00～17:30
会　場　北海道庁別館 10 階　労働委員会会議室
出席者　部会長(美深町教育委員会教育長)　石田政充
副部会長(北海道大学大学院教育学研究院准教授)　篠原岳司
委員(株式会社井上技研専務取締役)　犬嶋ユカリ
委員(寿都町立寿都小学校ＰＴＡ会長)　蝦名竜次
委員(留萌市立港南中学校長)　小澤洋一
委員(北海道恵庭北高等学校長)　片岡晃
委員(上ノ国町長)　工藤昇
委員(北海道千歳リハビリテーション大学顧問)　佐藤博明
委員(北海高等学校長)　山崎省一
委員(北海道札幌北陵高等学校ＰＴＡ会長)　山本美加
委員(札幌市立山の手小学校長)　山谷陽子
（敬称略）

主な意見等

これからの高校づくりに関する指針（案）について
○　農業などのグローバル化に対応するには、特に職業関係の教科の教員に対し、北海道として、最先端の情報や技術が入るような施策を講じるべき。 ○　道外からの入学者の受入れの拡大については、ただ枠を広げるだけではなく、高校の中身、教育の内容が大事だと思うが、可能性として制度上の様々な仕組みが整っていくということは歓迎すべきこと。 ○　この学校は特別、この学校を卒業したら、海外の有名な大学に行ける、そのような学校が１校あることで、子どもたちは学習意欲を刺激されて勉強するようになっていくと思うので、公立高校のトップ校を作るようなことも考えて行くべきではないか。 ○　従来の能力観が問い直されてきている中で、今までの競争的な学力の点数競争の中で争うというものとまた違う入試、教育内容、学校の形、授業の内容などが求められるなど、転換期に来ており、それに対応すること、スピード感に合わせていくことは難しいと思うが、公立のトップ校を作るような施策については、引き続き、考えて行くべきことではないか。 ○　産業構造の変化に伴い、北海道の独自産業の中での高校教育の在り方については、学科そのものの再編、具体的には、例えば、農業と商業、あるいは水産と商業といったように、複合的な学科の設置を考えなければならないのではないか。こういう人材を育成するためにはどうしたらいいのかということを考えると、現状の配置の基本的な考え方の中で、弾力的な発想を持つことも必要ではないか。産業人、産業のグローバル化ということに視点をもっと向けて、大学科の将来像をより違う観点で考えて行く必要があるのではないか。 ○　地域の将来を考えると、リーダーシップをとれる人材を育成するという視点が必要ではないか。公立高校は、条件が異なり、私立のようには行かない面もあると思うが、地域づくりは学校づくりと連動しているということは間違いないので、将来のためにそういう視点で学校づくりを行う必要があるのではないか。 ○　公立のトップ校を作ることは、地域のリーダー、地域の将来を担っていく人材を作っていくために仕方ないことではないか。

○　今後の高校づくりが子ども達にとって非常に魅力的なものになると良い。戦略的に、子どもや保護者にとっても、道立高校に進学して、こうすれば自分たちの求めるキャリアに進める、そういうことを見えるようにすることがとても大事であり、これがあるからここに行きたいと思える特色が作れると良い。

○　子どもたちが自分の行きたい高校、やりたいことができる高校を遠慮せずに選べるようになると良い。また、そのためにも、今後は、より一層、子どもにも親にも高校に関する様々な情報を提供していただければとてもありがたい。

○　公立のトップ校を作ることについては賛成だが、それによって、ますます、札幌に人が集中しないか、都市部と郡部の差が広がらないかということが懸念される。郡部の特色を活かすような産業と結びついた高校を作るなど様々な方策が必要。

　また、子ども達の進路選択には経済的な理由も大きく影響するので、道立高校に寮、寄宿舎を整備することも一つの方法だと思う。そうすることで、農業を学びたい中学生が寮のある農業のトップ校を目指して頑張るようになることが期待でき、また、郡部の中学生にとっても選択肢の拡大につながるのではないか。

○　今後は、コミュニティ・スクールの導入などにより、高校がより一層地域とつながるようになってほしい。

○　地方の高校も特色を強く出していくと、札幌や道外からも生徒が集まるのではないか。

○　都市部には都市部の良さがあり、郡部には郡部の良さがあるということで、北海道は広いが、各地域が高校を中心に生き生きと発展できるような北海道になると良い。

○　今回の指針で、学校規模に関して、「適性」の語が「望ましい」に変わったことについては、非常に重く受け止めており、このことから、道立高校の校長は、地域には、可能な限り地域創生の核として道立高校を残したいという道教委としての姿勢を読み取らなければならないと思う。それを読み取っていく基礎となる指針ができたことには非常に感謝する。

　しかし、全道的に、教育の機会平等が保障されていない面もあるのではないか。地方では若い教員が多く、都市部にはベテラン教員が非常に多い、これで、郡部の子ども達に平等な教育を提供できているのだろうか。また、生徒に求められる資質能力を身に付けさせる教育が必要とされているが、そのためには、求められる教員を、ある程度、柔軟に配置する人事が必要。教員の人事の在り方が、これから大きな課題になってくるのではないか。

○　郡部の小規模校には都市部のトップ校と異なり、学力のそれほど高くない生徒も多いが、そういった生徒に対する高校教育も一つの教育として必要であるし、高校は、町にとっても生徒にとっても必ず必要であり、仮に道立として維持できなくなった場合も市町村立として維持していかなければならないと思う。

○　北海道の気質、ある意味、競争力のない土壌が、問題であるように感じている。北海道が世界の中でこれから勝負するのであれば、それなりの力を付けていかなければならないし、大胆な発想力と覚悟がこれから教育現場により一層求められてくると思う。

○　これからの高校づくりなど長いスパンで考えるべき教育課題については、経済界、時代や社会からの要請など種々の制約があるかもしれないが、長い目で見た時に本当にどういうことが大切なのかもう一度考えてみる必要があるのではないか。

○　将来的に、子ども達が居住地や親の経済力などを気にせず、行きたい高校に行くことができるよう、選択肢が少しでも広がっていけば良い。

○　地域や地元とつながり続ける人を育てるということは教育の一つの目標として、絶対に外してはいけないことだと思う。

○　地域のリーダーについては、例えば学力が高いだけではなく、より広範な資質を持ったリーダーを作っていく努力も必要だと思う。

　また、道全体の教育の質を上げていくためには、学科の在り方を考えて行くことも必要だが、そこを支える教員の力量を育てたり、教育できる環境を作っていくことがますます大切になるのではないか。教員の働く環境の整備、教員に教育指導のスキルを付けること、そして、必要な人材を幅広く配置することが必要だと思う。